

海外便り

井村君江
(明星大学教授)

* Oscar Wilde 再評価につながる記念すべき二つの行事

今年1995年、ロンドンで Wilde 復活の契機となる二つの行事が相次いで行われた。

(1) 1月3日に、ヘイマーケットの Theatre Royal 楽屋入り口に、Wilde の戯曲上演百年を記念する円形プラークが入ったこと。(2) 2月14日バレンタイン・デイに、ウエストミンスター・アベイの Poet's Corner 西側窓のステンドグラスに〈Oscar Wilde 1854-1900〉と Wilde の名前が入ったことである。

(1)イギリス滞在中の2月25日、ヒヤシンスと水仙の咲くしかし寒い日の午後、Theatre Royal を訪れた。劇場の表ではなく建物の裏側、細い道を入りいくつかの建物が「コの字」型になっているカル・ド・サックの左側、Stage Door と書かれた扉に隣接する窓の隣りの壁に、プラークは付いている。イギリスで歴史的人物や作家たちに由緒のある建物を記念する円形のプラークは、通常は青色であるのにこれはくすんだ緑色である。Wilde を象徴的に語るためか、アイルランドの国の色であり、またグリーン・カーネーションの色でもある。プラークの円形の周囲には、白文字で上部には管轄市名〈Westminster City Council〉、下部にはプラークを寄付したロンドンの〈Oscar Wilde Society〉の名前が記されている。円形の中にはこう書いてある“The first performance of *A Woman of No Importance* 19th April 1893 and *An Ideal Husband* 3rd January 1895 by OSCAR WILDE were presented at this theatre. This plaque was unveiled by Sir John Gielgud on 3rd January 1995”。この劇場でちょうど百年前に、*A Woman of No Importance* が Herbert Beerbohm Tree の監督で上演された、いわばセンテナリーの記念碑である。名優の John Gielgud 卿によってこの記念表示板は、1月3日に除幕された。ロンドンのワイルド・ソサイティは、この百年前の当夜(8:30開演)のプログラムを表紙に使い、緑色の活字インクで印刷した19×40cmの縦長のプロシュアールを、この日限定125部記念発行したが、そのなかにプラーク作製の経緯、John Gielgud 卿に除幕を頼んだいきさつ等が2頁にわたり詳しく書かれてある。Gielgud 卿が Wilde の戯曲に初めて関係したのは、*The Importance of Being Earnest* の John Worthing 役を、Nigel Playfair Production で演じた1930年からのようである。

(2)ウエストミンスター・アベイの詩人コーナーに名前が入ったことは、Wilde に対するビクトリア時代のモラルの偏見が取り除かれ、文学者としての正当な位置に入ったことを示している。しかし死後95年目のことである。床に描かれた Browning や Tennyson、

Byron, Wordsworth, Auden, T. S. Eliot などの名前を見下ろすかのように、約6米の青色を基調に黄・緑・赤の彩りの美しいステンドグラス区切りの一つ、円と四角が二つずつ描かれている中に、Robert Herrick の名前の隣りに Oscar Wilde の名前が入ったのである。ワイルド・ソサイティの会員 Jeremy Maison や Jacqueline Wesley たちは、2月14日の式典を感動をもって語ってくれた。寺院内を埋め尽くした出席者が見守るなか、Wilde の孫 Merlin Holland が除幕を行ったあと、この日は *The Importance of Being Earnest* が上演されて百年後の日であるため、その戯曲のハンドバックの場面を、女優の Judi Dench が Lady Blacknell, Michael Denison が Earnest 役で朗読、アイルランドの詩人 Seamus Heaney のスピーチ、John Gielgud 卿の *De Profundis* の最後の章の朗読があった。Wilde をレディング監獄に送る原因となった Lord Alfred Douglas の great-nephew に当たる12代目侯爵 David Queensberry も出席——との寺院の Dean の言葉に、一瞬寺院内にざわめきが起こったが、陶芸家である彼の母は Wilde の息子 Vyvyan Holland と親しかつたので、出席したのは当然のことである。Merlin Holland は Oscar Wilde 全集の編集を終えて、いま Wilde 投獄の百年記念の作品を、BBC テレビ局のために制作中である。この式典に出席できて、Wilde の名誉回復を目の当たりにし安心したかのように、Wilde の義理の娘、すなわち息子 Vyvyan Holland の妻であった Thelma が、3月1日に84歳で世を去った。メルボルン生まれでエリザベス女王の服装の助言者でもあったが、夫が著書 *Son of Oscar Wilde* (1954) を書く際に、大へん貢献があったといわれている。

3月29日、王立オペラハウスで Catherine Mafitano の *Salome* を見ながら、半年前にアルバーニ劇場で見た Amanda Elwes の素晴らしい *Lady Windermere's Fan* の舞台を思いだし、Wilde の戯曲は、いまもイギリスの人々を惹きつける様々な魅力をもっている事を思い、色々な角度からの Wilde 再評価の時期が来た事を、満員の観客のなかで実感した。

4月23日、日本に帰って二週間目、ストラットフォードでのシェイクスピア誕生パレードに参加するため、いまグリニッチを出発する、という息子の報告電話をきいて、コーンウォールの主人からの手紙を開け、新聞切抜きの中の *The Times* の TV プログラム *Vision* 誌第一面のワイルドの写真が眼に入った。“A Wilde night with Oscar” という見出しでなんとBBC2の午後8:20から12:00まで二時間半、夜の番組全部といっていいほどの Wilde 特集である。Merlin Holland が制作協力していた *The Trials of Wilde*、次に *Fear to Appear Queer, Oscar Dear; Oscar and Me, by Simon Callow; The Life and Loves of Oscar*、最後に Film *The Picture of Dorian Gray* (1945) が、*The Importance of Being Remembered* の題の下に並んでいる。Wilde 再評価は、イギリスで既に始まっていたことを付け加えたい。